

令和7年度 学校教育自己診断 小学校（共通項目）

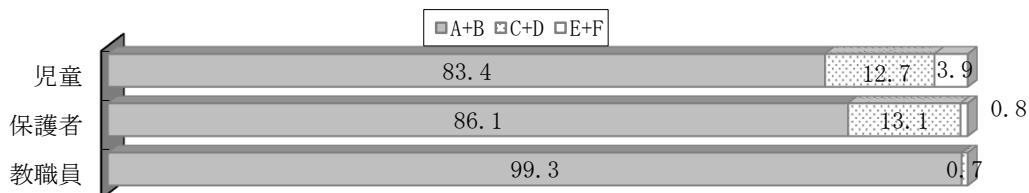
1. 学校の生活について

児童 学校へ行くのが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くのを楽しみにしている。

教職員 学校では、児童がいきいきとした学校生活を送れるよう、学校全体で取り組んでいる。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

前年度質問内容 教職員なし

肯定的回答割合前年度比:児童+2.6%、保護者+2.1%

前年度比で、児童・保護者の肯定的回答割合が増加した。

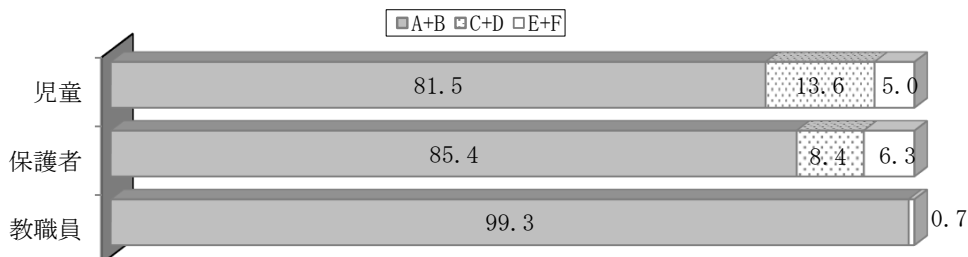
中学校調査と文言を揃えるため、教職員対象の設問を作成した。児童・保護者・教職員共に高い肯定的回答割合を維持することができている。引き続き、この項目の肯定的回答割合が100%となることを目標として、児童を中心とした学校づくりを進める必要がある。

2. 「確かな学力」の育成について

児童 学校で、自ら進んで学習に取り組んでいる。

保護者 学校は、子どもが進んで学習に取り組むように工夫している。

教職員 学校では、授業が「主体的に学ぶ力」がつくように工夫改善を図っている。



〔分析〕

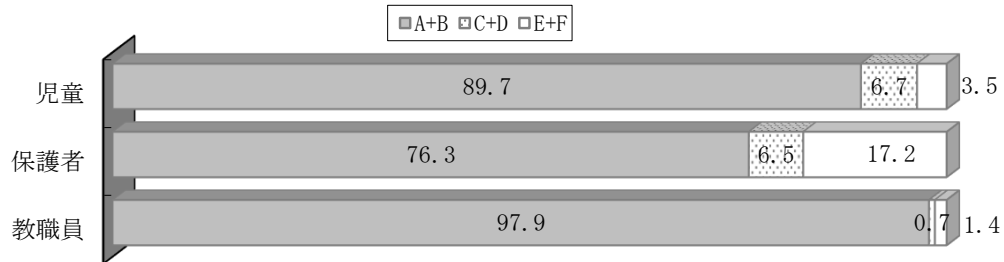
肯定的回答割合前年度比:児童+5.2%、保護者+1.8%、教職員+2.7%

前年度比で、児童・保護者・教職員の全てで肯定的回答割合が増加した。

特に児童において肯定的回答割合の増加率が高かったことは、教職員がたゆまぬ授業改善に取り組んできた成果であると分析できる。しかしながら、否定的回答割合とわからない・無回答を合わせた2割弱の層に向けて、どのようなアプローチを行っていくかについて、研究を継続する必要がある。

3. ICTの活用について

- 児童 学校で、コンピュータやプロジェクター、タブレット端末を使った授業をしている。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使った授業づくりを推進している。



〔分析〕

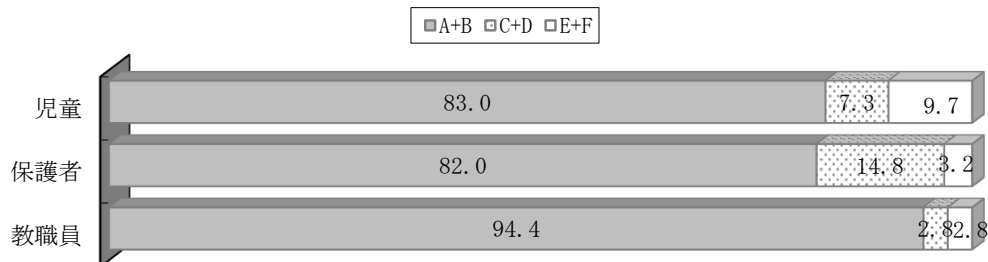
肯定的回答割合前年度比:児童-1.6%、保護者+9.9%、教職員+8.1%

前年度比で、保護者・教職員の肯定的回答割合が増加し、児童では微減した。

特に保護者におけるわからない・無回答の回答割合が大きく減少したことは、小学校が一人一台端末の持ち帰りによる学習機会を多く設定したこと等の成果であると分析できる。今後も、端末の使用が目的とならぬよう、適切な端末の活用について、学校間でも好事例の収集を進める必要がある。

4. 学校の通知表について

- 児童 通知表の内容は、納得できる。
 保護者 通知表は、よくわかる。
 教職員 学校の通知表は、児童・保護者にわかりやすく、適切な評価が行われている。



〔分析〕

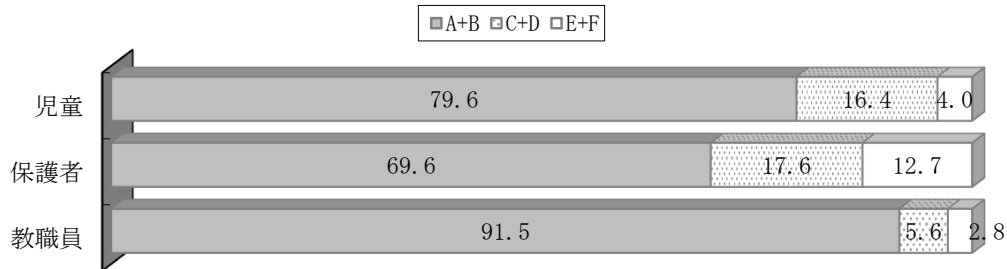
肯定的回答割合前年度比:児童+1.4%、保護者+2.2%、教職員+9.7%

前年度比で、児童の肯定的回答割合が微増し、保護者・教職員では増加した。

昨年度の課題であった教職員のわからない・無回答が大きく減少したことは、各小学校が指導と評価の一体化をより推進したことと関連があるのではないかと分析できる。ただ、保護者の否定的回答割合は依然高い水準であることから、教職員と児童・保護者間での評価規準・基準の共有等が必要であると分析できる。

5. 自学自習について

児童 自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、自学自習の取組を推進している。
 教職員 学校では、自学自習力育成のため、全体で取り組んでいる。



〔分析〕

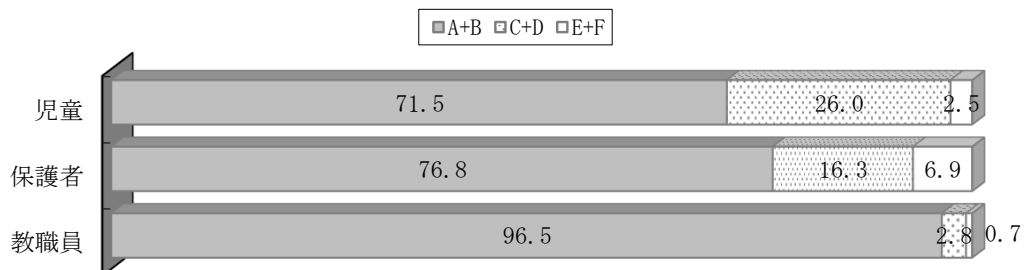
肯定的回答割合前年度比:児童+1.6%、保護者-3.1%、教職員-5.1%

前年度比で、児童の肯定的回答割合が微増し、保護者・教職員では減少した。

前年度肯定的な回答を行った保護者や教職員が、否定的な回答やわからない・無回答へと流れたと分析できる。各種学力調査等の結果等も鑑み、まずは学校として自学自習の重要性をいかに児童、保護者へ発信していくかの方向性を示すことが重要である。

6. 読書習慣について

児童 読書をよくする。
 保護者 学校は、子どもに読書の習慣がつくよう指導している。
 教職員 学校では、子どもの読書習慣の定着に向けた取組を、重点的に行っている。



〔分析〕

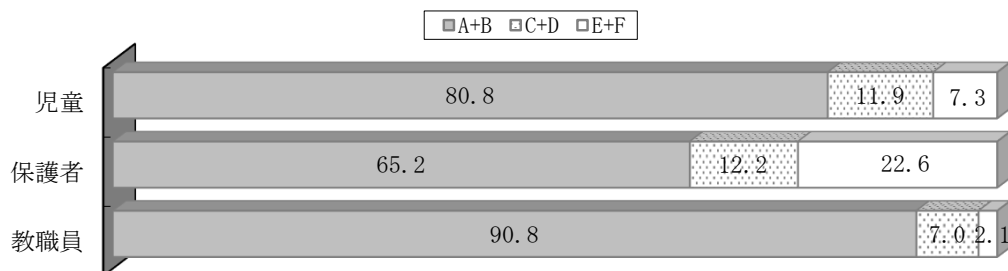
肯定的回答割合前年度比:児童+4.1%、保護者+1.1%、教職員-3.5%

前年度比で、児童の肯定的回答割合が増加し、保護者では微増し、教職員では減少した。

肯定的回答割合は増加したものの、読書の習慣化には至っていないと分析できる。引き続き、読書習慣の定着に向け、学校図書館司書や町立図書館と連携し、児童の4分の1以上を占める否定的回答割合の層に対するアプローチを続けていく必要がある。

7. キャリア教育について

児童 学校では、役割を果たすことの大切さ(かかり活動や当番など)や自分らしく生きることや、将来について考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、子どもが生き方や将来について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、児童が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



〔分析〕

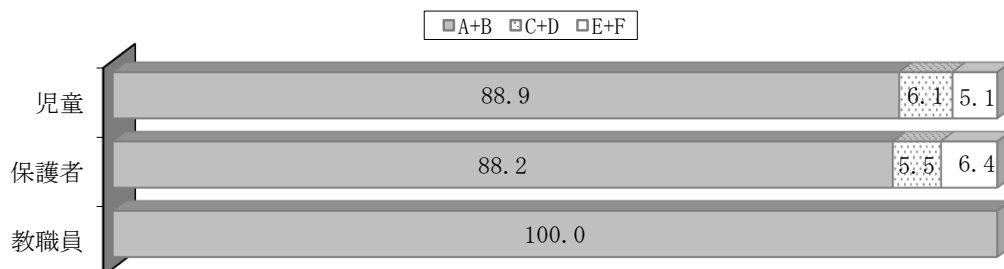
肯定的回答割合前年度比:児童+0.7%、保護者+5.7%、教職員+0.1%

前年度比で、児童・教職員の肯定的回答割合が微増し、保護者では増加した。

保護者の肯定的回答割合が大きく増加したことは、ICTの活用と同じく、学校が取組内容の発信に努めた成果であると捉えることができる。しかしながら、児童の約12%が否定的な回答を行っていることを鑑み、あらゆる教育活動の根幹にキャリア教育があることを周知していく必要がある。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

児童 学校では、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学ぶことができる。
 保護者 学校は、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学んでいる。
 教職員 学校では、お互いの違いを認め合い、人を大切にできる力を身につけるよう指導している。



〔分析〕

前年度質問内容 教職員:学校は～

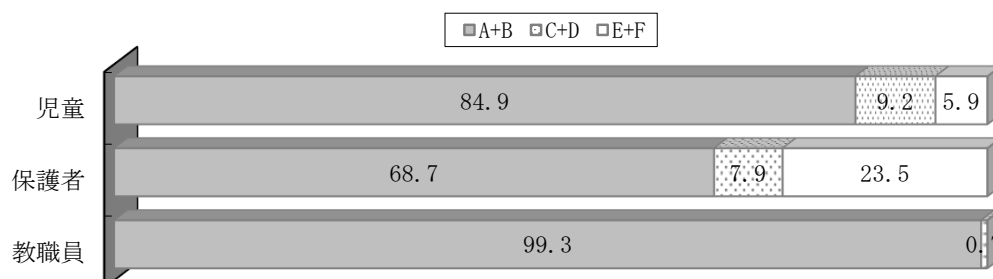
肯定的回答割合前年度比:児童+1.6%、保護者+0.9%、教職員±0%

前年度比で、児童・保護者の肯定的回答割合が微増した。

全ての教育活動の基盤に人権教育を据え、互いの違いを認め合う関係作りを、各小学校で適切かつ継続的に実施してきた成果であると分析できる。今後も「心の教育」について、その必然性を皆が納得したうえで、推進していくことが重要である。

9. いじめ防止・対応について

児童 学校では、いじめ防止の取組について学ぶことがある。
 保護者 学校は、いじめ防止・対応の取組を行っている。
 教職員 学校では、いじめ防止・対応の取組を組織的に行っている。)



〔分析〕

前年度質問内容 教職員:学校は～

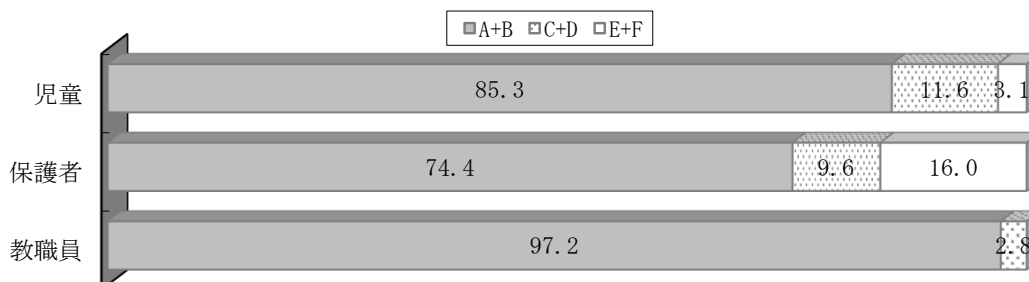
肯定的回答割合前年度比:児童+0.6%、保護者+3.3%、教職員-0.7%

前年度比で、児童の肯定的回答割合が微増し、保護者では増加、教職員では微減した。

依然として保護者のわからない・無回答の割合が高水準である。学校で実施しているいじめ防止授業等の発信に加え、家庭と共に実施できるよういじめ防止の取組について、研究していく必要がある。

10. 「食の教育」について

児童 自分の健康を考えて給食を好き嫌いなく食べようとしている。
 保護者 学校は、「食育」についての取組を推進している。
 教職員 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。



〔分析〕

前年度質問内容 保護者:学校では、子どもと食について話をしている。

教職員:学校では、食に関する指導を計画的に実施している。

肯定的回答割合前年度比:児童+4.3%、保護者+2.3%、教職員+3.1%

前年度比で、児童・保護者・教職員の全てで肯定的回答割合が増加した。

より具体的に食育についての捉え方を把握するため、文言を変更した。肯定的回答割合が増加した要因として、栄養教諭等と連携した組織的な食育授業が推進されたことが挙げられる。今後も、給食の様子や食に関する指導成果をさらに家庭へ発信し、学校と家庭が手を取り合う意識を高める必要がある。